
東方幻想郷録

Razgriz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方幻想郷録

【Zコード】

N2131BA

【作者名】

Razgriz

【あらすじ】

昔から曰くつきに好かれたり妖怪と遊んでいたり何故かテロリストとガチンコ勝負をしたり、そのテロリストを潰すために百鬼夜行をおこしたりと弾けた主人公が幻想入りします。体は人外、心は人間。そんなお話です。

山無し谷無し落ちもなし。

0話（前書き）

主人公設定

名前
久我 裕也
くが ゆうや

性格
人畜無害（自称）
甘党（他称）
家庭的（自称）

プロフィール

昔から妖怪や幽霊が見えていた。

その妖怪や幽霊は裕也を喰らおうと襲っていたのだが、本人はそれを遊びと勘違いしていた。

鬼との勝負に勝つことがあり、その報酬として妖刀、空割を得た。その勝負の内容とは、ジャンケン。

鬼は当時子供であった裕也を喰らうために勝負を持ちかけ、ハンデとして勝負の内容を裕也に決めさせた結果であった。

グアムへ修学旅行へ行つた際、自由行動で単独で観光をしていた時にテロに遭遇。

全力で逃げ出しているときに、観光でなぜかグアムにいた鬼と再開。そのまま鬼が能力を使用し、百鬼夜行を成し、テロリストを壊滅させた。

能力

曰くつきに好かれる程度の能力

風を司る程度の能力

あらゆるものを作り物へ変える程度の能力

武器

主に空割と爆発物。

0話（後書き）

こんな感じ？

1話（前書き）

まだ幻想入りはしない。

青い空、白い雲。
本日は快晴なり。

熱くもなく、涼しくもないそんな心地の良い昼下がり。
今日は過ごしやすいか?と100人に聞いたら70人くらいは過ごしやすいと答えるのではなかろうか。

そんな晴れ渡る空の下、全力疾走する少年の姿があった。

この小説の主人公である。
名を久我裕也といい、この街の有名人だ。

なぜ有名か、というのは機会があれば語るとしよう。

裕也が疾走する理由はいくつかある。

テストが終わり、午前放課だったために散歩と称してお気に入りの昼寝ポイントへ向かつたら、黒服サングラスのお兄さん方が大金と白い粉を取引していたこと。

それを目撃したことがばれて、鉛が飛び出る危なつかしい飛び道具をぶつ放されたからだ。

つまりとにかく命を狙われている。

黒服(以下黒)達は銃にサプレッサーと呼ばれる消音器を装着し、先ほどから50を超える弾丸を裕也に向って発砲していた。

すごい勢いで看板とか鉢植えとかガラスとか割れているけれど、そんなものどこ吹く風、裕也は周りの被害など考えずに街の中心へ突っ走つていった。

昼寝ポイントは街のばずれにあるため、森を通りなければならぬ。だが、問題がひとつある。

この辺には土地神が居り、とある神社を守護している。

その神社とは 博麗神社

一見廃れた神社なのだが、流れの妖怪に聞いたところ、現世と幻想の境界に建てられている神社なのだそうだ。

その神社の近くを通りると、なんというか、吸い込まれるような感じがし、正直怖い。

なが
そんなども言つていらぬなし

土地神に助けを求めよう。

そう決めて正規の道ではなく、博麗神社へと続く獣道へと進路を変更した。

しばらく走ると発砲音が消え、完全に黒を撒いたようだつた。

この森は昔から駆け回っていたため、庭のようなものだ。

「ハクタクう、ハハハハハハー、いるかああああああああ！」

博麗神社に到着し、土地神の名を呼んだ。

ハクタク。

それがこの神社の土地神だ。

本人は土地神ではないと断言するが、どうでもいい。

『騒がしいぞ、人の子よ。ここには来るなといつただろう』

重く、しづかな声。

廃れた神社から姿を現したのは人面牛身。顎鬚を蓄え、目が顔に3つ、胴体に6つ。角が額に2本、胴体に4本ある妖怪。

十年ほど前に知り合った妖怪だ。

1話（後書き）

みじかくね・・?

2話（前書き）

胡散臭い人登場

ハクタクとは十年前に知り合い、助けてもらつた。

経緯はどうあれ、今では一番付き合いの長い妖怪ではないだろうか。

『人の子よ、ここはお前が来て良い場所ではない。妖怪には…』

「はいはい。妖怪には妖怪の世界が、人間には人間の世界がある。それは相容れぬもので、故にお前はここに来てはいけない。だろ？耳にタコができるほど聞かされたよ」

ハクタクはため息をつくと、縁側にその身を伏せた。その背を裕也が撫でる。

『お前を追つっていた悪意のある人の子。今しがた妖怪に食われたぞ』

「気づいてたなら助けてくれればいいのに」

ある意味喜ばしい報告をしてくれたハクタクだが、つまり、それは裕也が追われていたことを知りながら助けてくれなかつたということになる。

それに対し、裕也は少し顔をしかめた。

暫く沈黙が続いたが、ハクタクを撫でる手は止めない。

この森には様々な妖怪がいる。

ハクタクと互角に殺りあう者もいれば、人に友好的なもの、人を拒絶する者、人を喰らう者。

そんな妖怪がいるのだ。

ふと、ハクタクが思い出したかのよつて口を開いた。

『今日は客人が来る。とても偉い御方だ。もつ帰れ、ここにいると
邪魔になる』

「妖怪？」

『うむ。境界を操り、現世と幻想を切り離した妖怪。名をハ雲紫と
言つてな、賢者と呼ばれている』

「そつか。ハクタクが邪魔だつていうなら帰るよ。またな、ハクタ
ク」

そう言つて、廃れた神社を後にしようとした瞬間

「御待ちなさいな」

ハクタクとは明らかに違つ、鈴の音のような女性の声が聞こえた。

『ハ雲様……』

振り返れば、紫色のドレスに、日傘をさした金髪の女性が博麗神社
の屋根に腰かけていた。

2話（後書き）

胡散臭い人の登場は今回これだけ。

3話(繪畫版)

バ...ゴパアツ!?

ハクタクがハ雲紫に対し、首を垂れる。

ハ雲紫は屋根からふわりと降りると、そのハクタクの頭を撫でた。

「初めまして、久我裕也。私はハ雲紫。紫でいいわ。スキマ妖怪よ」

突然の自己紹介。

「どうか何故自分の名を知っているのだろうか?」と、首をかしげる。裕也は自分の記憶を遡るが、いくら思い出そうとしても自分の記憶にこんな妖艶で胡散臭い女性はない。

「俺は久我裕也。よく変わり者って言われるけど、人間だ。何故俺の名を?」

そう問い合わせると紫はハクタクを撫でつつしづかに答えた。

「彼から聞いていたのよ。貴方のこと、貴方を取り巻く環境を」

どうやら、ハクタクから裕也のことを聞いていたようだ。

ハクタクと古い友人関係を持っているのなら、酒の肴か何かで自分のことを見女に話していても納得できる。

そのまま紫は続ける。

「鬼との勝負、百鬼夜行、妖怪との遊び。とても面白い人生ね?」

「否定はしない。スリルがあつて飽きないよ。でも、命がけの遊びは少し勘弁してもらいたいよ」

事ある」と、河童と天狗との上下関係の抗争や、鬼のケンカ、拳句には何故か現代に甦った八岐大蛇を倒すために妖怪を率いてドンパチをやらかしたこともある。

それのせいで、八岐大蛇を倒した人間という恐ろしい勘違いが発生し、日本どころか世界各地の妖怪、化者が裕也に勝負を挑んできたりと大変な思いをしたことがある。

どうにかしてくれと天ちゃん（天照大神）に泣いて頼んだといふ、快く勝負を挑んできた者を制圧してくれた。

「本当に面白いわね。貴方、幻想郷に興味はない？」

扇子で口元を隠しながら真っ直ぐに裕也を見据えた目は、妖しく輝いていた。

3話（後書き）

何してんだ俺…

4話（前書き）

夏目友人帳つて面白いよね（え

幻想郷？

桃源郷や理想郷ではなく？

まあ、そんなことはどうでもいい。

それよりも重要なことは、そこはかとなく面倒事の予感しかしないことだ。

この少年は長年厄介事に巻き込まれる傾向にあるので、そういうた
”厄介事、面倒事”に対する第六感といつべきものが優れている。

そしてその第六感が今までで最大級の警笛を鳴らしているのだ。

間違いない。

今ここで幻想郷とやらに興味があると答えてしまえば、間違いなく
巻き込まれる。

それだけは避けたい。

「幻想郷？あんまり興味ないなあ。それに、興味があるとしたら、
どうするのや？」

興味がない、と断言し、それとなく肯定した場合の行動を聞いてみ
る。

すると紫は胡散臭い笑みを浮かべ一言。

「落としていたわね」

わけがわからないよ。

そんな裕也の表情を読み取ったのか、紫はクスリと笑った。

「私がスキマ妖怪と呼ばれる所以は、『境界を操る程度の能力』にある。空間の境界を操つて、貴方を幻想郷へスキマ送りにしようかと思っていたのだけれど…。残念ね」

程度、ってなんだっけ？

腕を組んで考え始める裕也を余所に、紫はハクタクと会話をはじめた。

「それで？」「うち側から見た結界はどう？」

『最近、内側から何らかの影響を受けて何度も薄れ、歪み、裂けている。そして、そのせいで既に14もの妖怪が幻想へと流れた。何か大きな天災でも？』

『やつぱり…。天災ではないけれど、ここ最近になつて異変を起こそ馬鹿が増えてきたのよ。きっとそれが結界に影響を与えているのね。はあ、靈夢がしつかりしてくれればあの程度の異変で『博麗大結界』が異常をきたすなんてありえないのだけれど…』

紫とハクタクがあーだこーだと議論を交わしている。

美少女と人の顔を持つハクタクが言い合っている姿はシユールだな！」。

瞬間

ゾクッ

「 ッ！」

殺気が、溢れた。

。

4話（後書き）

The 急展開

俺はどこへ向かうのでしょうか

5話（前書き）

夢も希望も、神も仏もありやしねえ…

ハクタクは姿勢を低くし身構え、ハ雲紫はあくまで自然体を貫いた。いや、その殺氣程度では動じなかつた。

裕也はとこりつと…

「またおまえか」

田の前に現れたのは熊。

のような妖怪で、名前は知らない。

特徴をあげるとすれば、高さ1.6mの横が3mほど、田は三つあり血走つてている。腕は右腕しかなく、左の腕は鋭利な物によつて切り落とされたようだ。

しかし、片腕といえどその腕は丸太のように太く、鋭く細長い爪が3本生えていた。

裕也はこの妖怪にこの一週間で既に3回襲われており、今回を含めれば4回田になる。

実はこの妖怪、つい9日ほど前にこの森に流れてきた妖怪で、そのままいついたというわけである。

『人の子よ。お前はアレに何をしたのだ？お前だけを狙つてこるよう見えるが…』

そうなのだ。

この妖怪は今、裕也を血走った眼で睨みつけ、いつでも飛びかかるように姿勢を低くしている。

「いやあ、俺が弱そだからじやないかな？ハクタクは一応土地神だし『違ひ』…。そつちのハ雲さんとやらば霧囲氣的にヤヴァそうだし」

なんでだらうなー。と氣の抜けた会話をし、ふと思いついたかのように手を打った。

「せうだ、こいつの腕を空割で叩き斬つたんだー。そうだそうだ、思い出したぞ！居合いの真似事してたらいきなり襲つてきて、斬つたんだ！わかつたぞこいつが俺を狙う理由ー！」

ひやつほつーと何故か喜ぶ裕也に、妖怪が飛びかかる。

「速さが足りない！」

そう叫んだ裕也は、地面を転がるよつて回避し、ハクタクの横へと移動した。

『相手をせぬのか？』

「空割ないし。めんべくかこし。怖いし。空割あつてパフュ奢つてくれるなら頑張る」

ハクタクを盾にするみつて後ろに隠れ、やだやだと首を振る裕也。

「じゃあ、はー。空割。パフュは後で5杯奢つてあげるわ

紫色の裂け田から、愛刀である空割を取りだし裕也に渡す紫。

「嘘だと言つてよバー——イ」

「ところがどうこいこれが現実」

空巣を受け取り、虚ろな目をしてハケタケの前に出る

男に一言は無い。
仕方がないから……。

「パフェの為だ」。死んでくれ

取り敢えずパフェのせいにしてみた。

5話（後書き）

文末ください

6話（前書き）

—כָּלֵבֶן מִשְׁמַרְתְּךָ תְּרַבֵּן?

空割を抜く。

鬼から貰つたその刀は、刀身をよく見ると少し青く見える。

その鬼は言つていた。

鬼の打つた刀は、折れない曲がらない刃こぼれしない。
なんたつて鬼が使うんだ。

只の刀じゃ役不足さ。

白邊づに言つていた。

右手に刀を。

左手に鞘を。

鉄で作られた鞘は盾にもなるし、打撃にも使える。

非常に使い勝手がいいものだ。

腰を落とし、溜める。

息を吸い

。

「！」

ッ！

飛びだした。

(中々速いわね。)

妖怪は太いその腕を振るうが、当たらない。

正確には

当たらない。

裕也は常に妖怪の死角となる場所へと移動を続け、相手はその動きに翻弄され、一瞬動きを止める。

それは裕也を探すためのものだったのか、ただ単に大ぶりの攻撃が祟つてバランスを崩したのか。

ただ
一
瞬

それだけで十分だつた。

チャンスと見た裕也は瞬時に死角から飛び出し、土を握りしめ

「食うえ！」

熊の3つの目に投げつけた

眼を抑える熊。

「そうい！」

追い打ちをかけるように片足へ体全身を使って空割を突き刺す！

「からのッ！」

そのまま斬り払う！

完全に体勢を崩し、片膝をつく熊。

そして

奥義もクソもない。

只の力技。

圧倒的な強度と切れ味を誇る鬼の刀だからこそ成せる技。

その技は妖怪を頭から真つ一つにし、完全に沈黙させた。

「ウサギ」

キリリッと決め顔の裕也に紫が一言。

私に戦闘シーンは無理かもしねえ。

「グダグダね」

6話（後書き）

この本の執筆が、ついに終了。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2131ba/>

東方幻想郷録

2012年1月14日18時51分発行